



返り討ち、敗北射精させる話。

孕んでとやうて来る、淫乱な
ふたなりくっ—のお姉様たちを

R18

エロバトルン文庫





登場ヒロイン

アヤカ

天才でイカセ流忍術を習得したヒロイン。ちんぽ無し。將軍の娘と判りふたなりくノーに狙われる。

キョウカ

ライバルのふたなりくノー。小柄でクールな包茎ちんぽ。アヤカを一人で倒し孕ませたいと思っている。



レン

ふたなりくノーたちの頭目。無慈悲な長ちんぽ痴女。ふたなりくノーたちを操りアヤカを追い詰める外道。

孕んでとやって来る、淫乱なふたなりくノーのお姉さまたちを返り討ち、敗北射精させる話。

1. 迫るふたなりくノーたちをWフェラチオで敗北射精させる！

「私が……将軍の娘！？……きゃ！」

孤児だった私が知った本当の親に、動揺するまもなく……私を育ててくれた『ふたなりくノー』のお姉さまたちに狙われ森の中を逃げている。

「まちなさい……アヤカ♥誰も殺そうなんて思っていないのよ……」

「そう♥ただ、あたしたちの子をアヤカに生んでもらいたいだけなの♥」

忍び装束に包まれた巨乳を、ぶるんぶるん♥震わせながら走る三つの影。

しかし、私以外の二人のくノーたちは股間にもうひとつ揺れるモノをたずさえていたのだ。

忍び装束の間から恥ずかしげもなく、ビンビンに勃起させた『ふたなりちんぽ』をさらけ出しふたりのお姉さまが私を狙ってくる。

「やめて！ やめてくださいお姉さまたち！ アヤカが、アヤカが何をしたって言うんですか！？」

黒髪をなびかせ木々をよけながら今の私は、ひたすらあてもなく走るしかなかった……

「チカ……このまま、追い詰めるわ……ふふ♥わたしが将軍家に玉の輿するのよ……」

「あたしに、指図するんじゃないわよナラカ！ 絶対あたしがあの子を孕ませるのだから♥」

お姉さまたちのいやらしい欲望の声が、聞こえてくる。

なぜこんなことになってしまったのか……

『イカセ流ふたなりくノ一』の里の頭目に、拾われた私はアヤカと名づけられた。

修業は厳しかったけど、お姉さまたちに今日まで可愛がられて来たのに……

頭目のもとに將軍家の人たちがやってきてから、里のお姉さまたちが私を見る目が変わってしまったのだ……

その理由は私が將軍の隠し子であり、後継者として迎え入れたいというものだったらしい……

そして、里のふたなりくノ一のお姉さまたちは一斉に、私にちんぽを向けてきた。

「こらあ♥まちなさいってば♥♥♥その黒くて長い綺麗な黒髪をあたしの精液で白く染めてあげる♥♥♥ああああん♥♥♥♥」

びゅびゅう♥♥♥♥

ひとりのふたなりくノ一が自らちんぽをシゴき精液で攻撃する、ふたなり忍法『手淫剣』をぶちまけてきた。

「くっ！」

よけた白濁液の手淫剣は、木々にからまりまるで蜘蛛の巣のように私の進路をふさぐ。

「ふたなり忍法まで使うなんて……お姉さまたち本気なんだ……」

逃げることをあきらめて、私は追手のお姉さまたちに向き直る。

「あきらめたようねアヤカ♥」

「大丈夫よ……怖くないわ♥あなたはただ……気持ちよくなるだけでいいの♥」

それも、悪くはない♥

ずっと私も欲しかった……ビンビンに勃起して、私に種付けしたいと震えているお姉さまたちのおちんぽが……

拾われた部外者の私は『ふたなり』ではなかった。

ちんぽを使ったふたなり忍法が使えない私は、拾ってくれたお姉さまの役に立つため他のイカセ流の忍法をひたすらに極め、磨いてきたのだ。

正直に言えば、私はちんぽがほしかった……だけど。

「ふたなりくノ一同士が戦えばどうなるか……お姉さまたちもわかっているはずです！それ以上近づかないでください！」

必死の願いだった。……けれども。

「なに？もしかして……わたしたちに勝つつもりなの？ふふふふ♥……うふうん♥♥♥」

「ふたなりくノ一って♥あなたはちんぽも生えていない半人前じゃないの！頭目に可愛がられているからって調子にのるんじゃないわよ！あはあん♥♥♥」

私の最後通告もむなしく、お姉さまたちは勃起したちんぽを再びシゴき始める。

ビクビクと震えるふたつのちんぽが、射精寸前まで膨らんでいく。

「食らいなさい！ふたなり忍法『亀甲射精縛り』いっくうううう♥♥♥」

びゅ♥♥びゅびゅ♥♥♥

白い網が私に向かって襲い来る。

「きゃ！きゃああああ！！」

一つ目の網はよけたものの、二つ目の網が私を捕えてしまう。

「あ♥やだ.....だめ！きゃ！網が絡んでくる.....はう♥」

オス臭い臭いの白い網が私の身体に浴びせられると、それが徐々に絡まり
どんどんキツく締まってゆく。

「ふふふ♥どうかしら.....亀甲射精縛りのお味は？」

ギリギリとおっぱいの谷間を、腋を太ももをそして.....おマンコを精液ででき
た白い縄が締め付けてくる。

「もがけばもがくほど、敏感な部分に食い込んでいくわよ♥」

お姉さまの言う通りだった.....私の股間に白い精液でできた縄がギリギリと
くいこんでくる。

「あ♥ああ♥だめ♥だめです♥お姉さまの精液が私の大事なところに.....食
い込んできちゃいます♥」

マン筋にあわせて、生きているように蠢く白い縄。

シュリ♥シュリ♥♥シュリ♥♥♥

「あああ！あん♥だめ！そんな動かないで！ひい！！」



マンコが♥マンコが無数の精子に擦られて.....ああああ.....

シュリ♥シュコシュコ♥♥♥くぷ♥♥♥ちゅぷ.....

「あら？感じているのかしらアヤカ？食い込んでいる縄が濡れてきているわよ？」

「いやらしい♥縄で縛られて愛液だしちゃうなんて♥欲求不満じゃないの？」

シュコシュコ♥♥♥ちゅぷぷ♥♥♥ぐびゅ♥♥♥シュコ♥にゅぷ♥♥シュコシュコ♥♥♥

「やだ……感じてなんかない……感じてなんか……な……イイ♥♥♥」

食い込んでくる縄に必死に耐える私。だけど……

もがく私をふたりのお姉さまたちが見たこともない顔で、見下ろしていた。

「可愛いわあ♥アヤカ♥♥♥ずっと前からあんたが欲しかったのよ♥♥ほら、見て♥ちんぽから先走り汁が止まらないわあ♥♥」

「ええ……ほんとう♥すごく綺麗に……おっぱいも大きくいやらしく育ったわね♥あああん♥その身体……わたしのちんぽでめちゃくちゃにしてあげる♥♥♥」

ビビンッ

ブウウンッ

振り返ったふたつのちんぽが、更に大きく膨らんだ。

「すごい……お姉さまたちのちんぽ……はぐうう！？うぐ！」

私が目を奪われた瞬間に、そのちんぽが唇に押し当てられそのまま喉の奥へと押し込まれる。

「ああああん♥♥♥思っていた通り温かくて♥♥♥狭くてきつくて♥最高よお♥♥♥♥」

んぐ♥ぐぷぷぷうう♥♥♥じゅぶ♥ぐぽぽぽぽぽおおお♥♥♥

「動かすわね♥アヤカの可愛いお口を♥あたしのふたなりちんぽでイラマチオしちゃうんだから♥」

ぐぷぷううう♥♥♥ぐっぽぐっぽ♥♥

「んぐううう！？ふぐふぐうううう！！んひゅう♥♥♥♥」

ちんぽが♥お姉さまのちんぽが♥私のお口を犯してる♥♥♥

「はあはあ♥どう？アヤカ？気持ちいい？あたしは気持ちいいわあ♥♥♥生意気なあんたの愛らしい口マンコをズボズボ犯せるなんて♥♥♥夢みたい♥♥♥」

顔を赤く染めて、お姉さまがあたしの口をオナホのように使っている……

悪夢のような光景に、私はただ股間を濡らすしかなかった。

「ちゅぶ♥♥んぶぐっぽ♥♥♥ちゅぶちゅぶちゅぶううう♥♥♥♥」

「あ♥ああ♥すご♥舌がアヤカの舌が♥♥♥あたしのちんぽ愛してくれている♥♥♥♥気持ちいい♥ちんぽ気持ちいいわよ♥いいのね♥アヤカも感じているのね！！もっとしてあげる！もっど！！」

ぐぷぷぷうう♥♥♥ぐびゅ♥ぐぽぽぽぽおおおお♥♥♥♥

恥ずかしげもなく、荒い息をあげてさらにちんぽを突っ込んでくるふたなりのお姉さま。

「あ♥あああん♥上手よ……アヤカ……あ♥イク♥イクイク♥♥♥イっく♥」

「ふぐうう！？ひゃいえへ♥おねえひやま♥んぎゅう♥♥♥♥♥」

びゅ♥びゅびゅううううう♥♥♥♥びゅびゅうううう♥♥♥

「んぐ♥んぐんぐふ♥♥♥んぐんぐ♥♥♥♥あはあん♥」

湧き出つづける精液を窒息しないように、必死に飲み込んでいく。

「あ♥ああ♥アへ♥アへエ♥♥でてる♥アヤカのお口にふたなりちんぽで♥射精しちゃった♥♥♥」

射精が終わってもビンビンに勃起し続けるちんぽをアへ顔でシゴくお姉さま。

「チカ……ずるい♥わたしも……覚悟しなさいアヤカ♥」

「ひっ♥や……ああああん♥♥んぐふ♥♥」

もう一人のお姉さまのおちんぽが間髪入れずに、私の口にねじ込まれる。

「あああ……なんて……気持ちいいお口なの……すごい♥これが將軍の娘だなんて♥♥♥はしたないわよ……アヤカ♥ああ♥すごくイイ……」

じゅぽじゅぽ♥♥じゅぽじゅぽおお♥♥じゅぶじゅぶ♥♥♥

何度も何度も出し入れされる、お姉さまのちんぽ♥

舌の上で裏筋がズリズリとこすれるたび、「あんあん♥」とまるで犬みたいに舌を出してあえぐお姉さま。

じゅぶ♥じゅぽぽ♥♥♥じゅっぶじゅっぶ♥♥♥

「んぐ♥んう♥んふうふうう♥♥♥♥イッて♥♥♥んぐんぐううう♥♥♥♥」

「あ♥あああああ……すご♥舌が絡んでわたしをイかせようとしてくる♥ふふ……さすがね♥でも、わたしはチカみたいに早漏じゃないわよ♥ほら♥♥♥」

「ふぎゅ！？いやああ♥♥おっぱ……ああああん♥ふぐ♥んぎゅ♥♥♥♥」

私の口にちんぽをぶち込んだまま、両方のおっぱいの先端を五本の指がそれぞれ愛撫してくる。

さわ♥くぷ♥♥くりゅくりゅ♥♥♥ぎゅ♥♥

「ふぐううう♥♥♥んん♥♥んううううう♥♥♥♥んぐ♥♥♥ん♥んん♥」

指が生き物みたいに、私の乳首をもてあそんでくる。敏感なおっぱいがビクビク揺れて、さきっぽがジンジンしてくる♥

「ふふふ.....感じて♥いるようね♥あはあん♥♥♥ほら♥お口がお留守よ♥もっとしゃぶって♥わたしにご奉仕しなさい♥」

ぶぎゅぎゅぎゅううう♥♥♥♥♥

「んふうううううう♥♥♥♥♥んぎいいいいいい♥♥♥♥♥」

根元までちんぽがぶちこまれる。下唇にお姉さまのおマンコが当たるほどに押し付けられたうえに、乳首は容赦なく掴まれ引き伸ばされてしまう.....

「うふふふふ♥♥♥いい顔よ♥アヤカ♥情けない顔.....頭目が見たらなんて言うかしら.....ね！！」

じゅぼじゅぼおおお♥♥♥じゅっぶじゅっぶ♥♥♥ずぼずぼおお♥♥♥

また、ちんぽが私のお口のナカを犯し始めた。

「ふぐ♥♥♥んぐんぐうう♥♥♥ぶぎいいいい♥♥♥んぐんぎゅ♥♥♥ぎゅふ♥♥♥♥♥」

容赦のないふたなりくノ一のイラマチオ。口をマンコのごとく犯されて.....私は.....私は.....

「あはははは♥こいつ！口マンコされて愛液垂れ流しているわよ♥どんだけ好きモノなのよ♥♥♥」

もう一人のお姉さまが、お尻をかき分けて私の大事なところを見ている♥

「ふう♥ふう♥♥すぐにぶちこんであげたいとこだけど.....しっかり子宮が降りてきてからじゃないとね♥確実に孕ませなきゃ♥感謝しなさい♥あたしがあんたのマンコ舐めて気持ちよくしてあげる♥♥♥」

「ふぐ！？んや♥♥♥まっれ♥♥♥んぎゅぷ！？」

「口がお留守だって♥さっき言ったでしょ？あなたは気持ちよくなっていいの.....今はね♥♥♥」

ちゅぷ♥♥.....ちゅぷ♥♥♥ちゅちゅ♥♥♥ちゅぷう♥♥♥

あ♥♥♥あああああ♥♥♥♥舐められてる.....お姉さまに恥ずかしいところ
.....全部知られちゃう♥

ちゅぷ♥♥ちゅぷううう♥♥ちゅちゅ♥♥♥

じゅぼじゅぼ♥♥♥ずぼぼぼおおお♥♥♥じゅっぶじゅっぶ♥♥♥♥♥

口マンコでおちんぽを、おマンコでペロちんこを受け入れながら縛られた私は、なすすべなくふたなりくノーに犯され続ける。

「んふう♥♥♥いい♥♥♥おねえはま♥♥♥♥んぎゅ♥♥♥んぐふ♥♥♥いい.....んふう
ううううう♥♥♥♥♥♥♥♥」

「はあはあはあ♥♥♥すごい♥なんてすごいお口♥♥♥♥もう.....もう.....だめ.....
ちんぽいい！ちんぽいい！おちんぽ耐えられない♥♥♥」

「んちゅぷ♥♥♥こっちもよ♥♥♥んちゅ♥♥はあはあ♥ペロなのになんぽと勘違いし
てるのね♥すごい締め付けてくる♥♥あはん♥あたしもおかしくなっちゃう♥♥♥♥
んちゅううう♥♥♥♥♥」

ちゅぶぶぶううう♥♥♥♥じゅぼじゅぼお♥♥♥♥ちゅっちゅ♥♥♥ずびゅ♥♥♥じゅびゅ
ううう♥♥♥♥じゅっぶ♥♥ちゅぼおおおお♥♥♥♥♥

「イクの.....フェラチオでイっちゃうううのおおお♥♥♥♥♥」

「イク！クンニでイっちゃううううあひゃああああ♥♥♥♥♥」

「んぎゅ♥♥♥んひゅううう♥♥♥♥♥インびゅううううう♥♥♥♥♥♥♥♥」

びゅびゅううう♥♥♥♥♥びゅるるる♥♥♥♥♥ぷしゃああああ♥♥♥♥♥♥♥

そして.....みんなが一斉に絶頂した。

湧き上がる白いふたつの噴水と、私のおマンコから吹き上がる愛液の雨が熱い身体に降り注ぐ。

「ふたなり忍法.....『浄化愛液雨』」

癒しの忍術が、私を縛っていた白い縄を溶かしていく。

「ああああ♥♥♥すごい♥気持ちいい♥♥♥♥」

「やっば♥くせになりそう♥♥♥♥」

敵の前で無様にも、呆けているお姉さまたち……そのちんぽを両手でつかみ、唇の前に引き寄せた。

「お覚悟……」

じゅぶ♥♥♥じゅぼぼぼおおおお♥♥♥♥シュコシュコ♥♥♥♥

「ふぎいいいい！？アヤカ！？ひゃああああん♥♥♥♥♥」

「な！いつのまに！やめ！やめなさい！ああああああ♥♥♥♥」

お姉さまたちのふたなりちんぽを今度は私がしゃぶりつくす。

じゅぶ♥♥♥じゅぼぼぼ♥♥♥♥シコシコシコ♥♥♥♥



「ひっ！まって！ほんとにまって！いったばかりで敏感なの！ひゃあああああ
あん♥♥♥♥イイ♥♥♥♥イイ♥♥♥♥♥」

「やだ♥♥やだああああ♥♥♥今いったら♥♥♥♥射精できなくなっちゃう♥♥♥♥あん
たを孕ませられない♥♥♥やあああああん♥♥♥♥♥」

「イってください.....お姉さまたち.....ふたなり忍法『極楽絶頂死』」

使いたくなかった禁断のふたなり忍法.....これを受けたふたなりくノーは、もう二度と勃起することは無い.....

死ぬことはないが、勃起しないちんぽでは.....ふたなりくノーとして生きていくことはできなくなるのだ.....

「や！ やだ！ やめて.....ちんぽ勃起できなくなっちゃう！！」

「ひっ！ いや！ フツウの女の子に戻っちゃう！！ あひ♥」

ふたつのちんぽを同時にくわえ、舌で亀頭を両手で陰茎をしゃぶり、シゴキ倒す！

じゅぶ♥ちゅぶぶぶ♥♥♥ちゅば♥♥♥シコシコシコ♥♥♥♥ちゅぶぶぶう♥♥♥

「ひぎ！ ? イグ！ イくううううううう♥♥♥♥♥」

「あひゃ♥♥♥イグうん♥♥♥イくううううううん♥♥♥♥」

どびゅびゅううう♥♥♥どっぶ♥♥♥どびゅどびゅうううう♥♥♥♥びゅびゅうううう♥♥♥♥♥びゅるびゅる♥♥♥♥びゅびゅうううう♥♥♥♥♥

「んぐ！ ? んふう♥♥♥♥♥イって.....イってくださいお姉さまたち.....はあはあ♥ちゅぶ♥ちゅ♥♥♥」

「あひいいいいいい♥♥♥♥♥きもちいいいい♥♥♥♥♥アヤカのお口で敗北射精しちゃうう♥♥♥♥♥むりいいいい♥♥♥♥」

「だめだめだめええ♥♥♥♥♥孕ませたい♥♥♥あたしがアヤカを孕ませたかったのにいい♥♥♥♥あひゃああああ♥♥♥♥♥」

ぴゅる♥♥♥♥びゅびゅ♥♥♥♥びゅるる♥♥♥♥どびゅびゅびゅびゅうう♥♥♥♥♥



びゆる♥♥♥びゆるる♥♥♥どっぴゅううう♥♥♥.....びゆる.....ぴゅ♥

ふたなりとしての最期の長い射精が終わり、ふたつのちんぽがぐったりと横たわった。

「はあはあ♥すごかった♥♥♥ああ.....しあわせえ♥」

「アヤカ♥あたしのアヤカ♥.....はあん♥♥♥よけて.....よけてアヤカ！」

「！？はっ！」

お姉さまの言葉に我に返った私は即座にその場を離れる。

びゅびゅ♥♥♥びゅびゅ♥♥♥びゅるる♥♥♥

「あひゃあああん♥♥♥♥またイク！！！！おほおおおおお♥♥♥♥♥」

「あひいいいいん♥♥♥♥もうでないよおおお♥♥♥♥イク！！！！」

白濁液の手淫剣が、私とお姉さまがいた場所にぶちまけられていた。

それを全身に浴びたお姉さまたちは、再び絶頂にもがきアへる。

「ちっ！避けられたか！運のいい奴！」

そんなお姉さまたちには目もくれず、私に向かいくる新たな追手のお姉さま
.....

私の貞操を守る旅は始まったばかりなのだ.....

2. ふたなりライバルとの共闘！ ザコくノーたちのみじめな手コキ、足コキ敗北射精。

数刻を待たずしてふたたび……ふたなりくノーとの激闘が繰り返されていく。

「お覚悟……ふたなり忍法『極楽絶頂死』」

「や、やめて！ まってアヤカ！ 許して！ あたしはあなたのことが好きなの！
やだ！ やめ！ あ♥ああああああ♥♥♥♥あひ♥♥♥♥イク♥♥♥♥イクうううううう
♥♥♥♥♥」

びゅばああああ♥♥♥♥びゅるるるるうううう♥♥♥♥♥♥♥♥びゅるる♥♥♥♥

シゴかれたふたなりちんぽから、大量射精したくノーがまたひとり崩れ落ちる。

「はあはあ……はあ……」

白濁の返り精液をあびて、私の身体は白くオス臭くなっていた。

一体これで何人目なのだろう……私に將軍の血が流れているというだけで……

「里にいた時に告白してくれれば……」

振り返れば、萎えきったちんぽのお姉さまたちが倒れている。

ふたなりでの最期の快樂に酔いしれて自らちんぽをいじり、くノーにあるまじき醜態をさらしていた……

「フン……やるではないか……さすが頭目様の一番のお気に入り……だが、あと何人もつかな？」

そう……私の前にはまだ、ふたなりくノーの集団がいる。

「ふふふ♥せいぜい頑張ることだ……精魂はてたところで、我が極太ちんぽで孕ませてやるぞ♥♥♥♥」

そして.....この集団のリーダーこそが、里で一番のふたなり巨根の持ち主である剛根のアマネ。

「アマネお姉さま.....」

「フフ.....気分がいいぞアヤカ♥やっとお前を我がハーレムに加えることができる♥♥♥」

金髪ショートの精悍な顔立ちの美女の青筋を立てた巨根が私をつけ狙うように、ビクンビクンと震え鎌首を持ち上げている。

ちんぽと同じく目を奪われる爆乳は、赤いビキニの忍び装束からはみだすほど大きい。

そんなスタイルのいい筋肉質な体から、繰り出される剛根の快樂突きであまたの女たちを絶頂させ虜にしてきたのだ。

「やめてください！アマネお姉さま！なぜみんな私を襲いだしたのですか！？昨日まであんなに優しくかったのに.....」

アマネお姉さまはそんな私をあざ笑うように見下して、爆乳を揺らした。

「フン！決まっているだろう.....頭目からの命令よ.....アヤカをお前を孕ませていいとな！」

「！？頭目が.....うそ！うそです！」

一歩、二歩と私はあとずさる。

「ああ♥いいぞ♥その顔♥その顔が見たかったのだ♥♥♥犯す！絶対に我れが犯す！！やれ！みなのもの！」

「「「はっ♥」」」

アマネお姉さまの命令で、一斉に動き出すふたなりくノーたち.....

私にはもう……誰も……

「左が手薄だ！ぼーっとするな！！アヤカ！」

「はっ！？」

びゅびゅ♥♥♥びゅるる♥♥♥

放たれる白濁液の手淫剣が黒髪をかすめる。文字通り間一髪、私は左に避け切ることができたのだった。

「クソ！今一步だったのに！どういうつもりだキョウカ！」

私を助けてくれた声の主に、アマネが激怒する。

「どうもこうもあるか！たった一人の女にイカセ流のふたなりくノーが群れて襲うなど恥ずかしくないのか！」

小柄だが大きなおっぱいをツンと張り、青いリボンで結んだ茶色い髪をかきあげて私の隣に降り立ったふたなりくノー。

「キョウカ……どうして」

「勘違いするなアヤカ……お前を倒すのはアタシだからだ！」

小さなふたなり包莖ちんぽをピンと勃起させて青いビキニの忍者装束を着たキョウカは、アマネお姉さまたちと向かい合う。

「ありがとう……キョウカ……」

「だから、勘違いするなど言っているだろう！くるぞ！」

初撃をよけられたふたなりくノーのお姉さまたちだったが、未だにちんぽはピンビンに勃起したままシゴいている。

「覚悟しろ！裏切者め！はああああん♥♥♥♥射精するう♥」

「いきなさい！アヤカ！ああああん♥♥♥イツク♥♥♥」

「ぶっかけてあげる♥♥イク♥イクイク♥♥♥うふううん♥♥♥」

びゅ♥♥びゅびゅ♥♥♥びゅる♥♥♥

四方八方からオス臭い『手淫剣』が放たれてくる。だが、冷静になれば単調な攻撃にしか見えない。

白濁の弾丸を潜り抜けた私は、ひとりのお姉さまの背後をとる。

「しまっ……ひっ♥アヤカの手があたしのちんぽに！？」

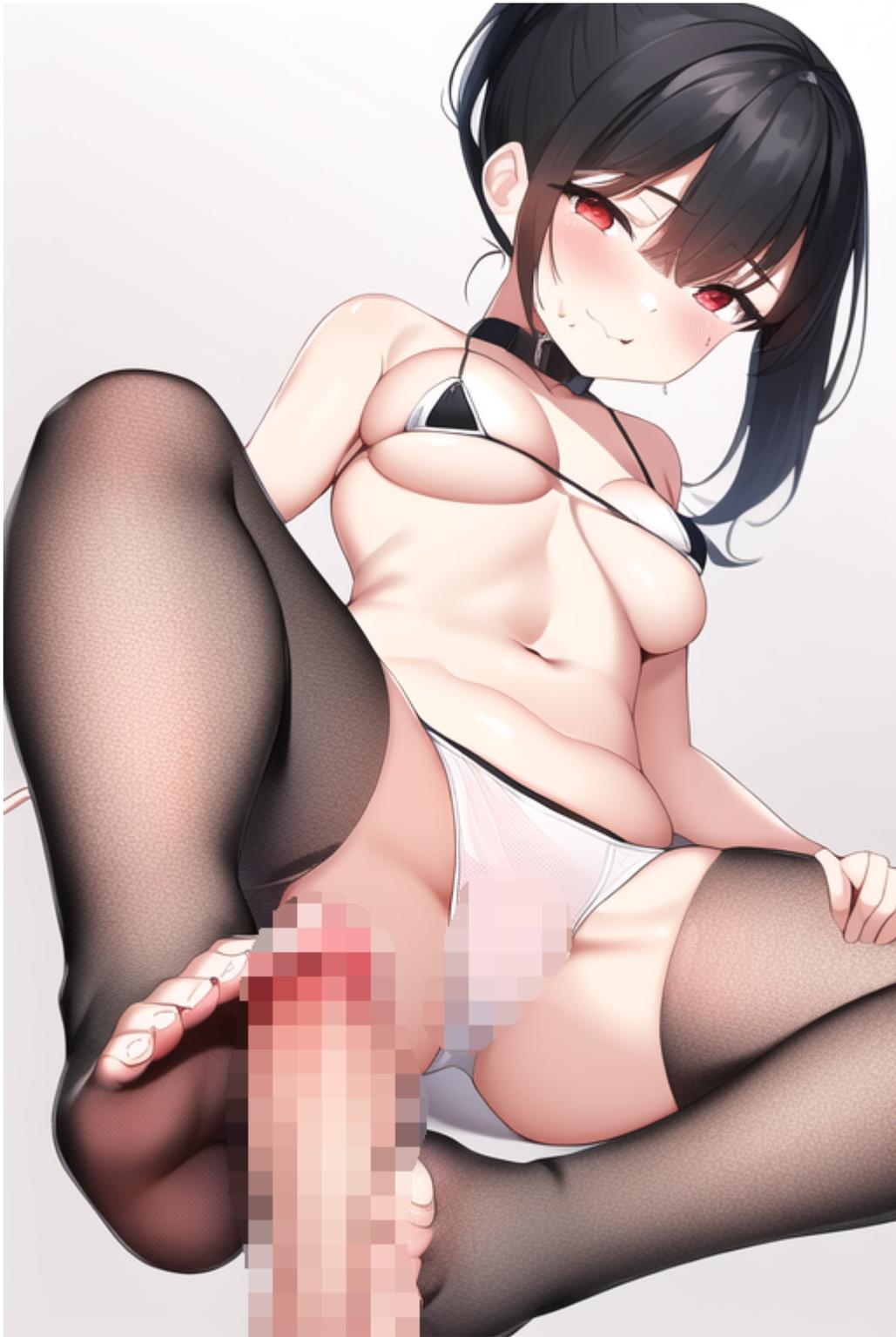
シコシコシコ♥♥♥シコシコシコ♥♥♥シコシコシコ♥♥♥

「ひいいい♥♥やめ！やめてえええ！！そんな雑にちんぽ扱わないで♥♥♥だめ！イっくう♥♥♥♥♥アヤカの手コキでイっくうううう♥♥♥♥♥」

びゅるるるうう♥♥♥♥どびゅびゅううう♥♥♥♥♥びゅびゅ♥♥♥

「ユカ！おのれ！ユカの仇！！はああああん♥♥♥おっぱい♥揉まれ♥ちんぽ足コキ！？」

モミモミ♥♥♥シュコシュコ♥♥♥ムニューウ♥♥♥シコシコシコオ♥♥♥♥



「屈辱！！あああ♥♥足コキで！あああん♥足コキでふたなり人生が終わるとは！.....無念！！あひいいい♥♥イックううううう♥♥♥♥♥♥♥♥」

びゅば♥♥♥びゅるるるるうう♥♥♥♥♥びゅびゅううう♥♥♥♥♥びゅる♥

二人のくノーを仕留め終わる。

キョウカのほうは……

一人のくノーを羽交い絞めにし、そのちんぽをシごいている真っ最中だった。

「死ね！裏切者キョウカ！包莖のまま、ふたなり人生を終えるがいい！はあ
ああああん♥♥♥」

残る三人のくノーたちのふたなりちんぽが、キョウカと捕まったくノーに向けられる。

「味方ごとアタシをイかせるつもりか……」

「ま、まって！助けてくれ！ヒナ！味方にまでぶっかけるつもりか！いやだ！
たすけてええ♥♥♥ひいいいいい♥」

キョウカに捕まったくノーが、ちんぽをビクつかせ命乞いをする。

「ふん♥敵に捕まるお前が悪いのだ！任務は完遂する！安心してイクがいい
トモエ♥あふううん♥♥♥」

「じゃあね♥ふたり仲良くいきなさい！はああああん♥♥♥」

「イクイク♥♥♥ぶっかけるうう♥♥♥♥死ね！裏切者ども♥」

びゆるるる♥♥♥どぴゅううう♥♥♥♥びゅびゅう♥♥♥

キョウカたちに容赦なく精液が浴びせられた。

「あびゃああああ♥♥♥イク♥♥♥イクううう♥♥♥♥♥」

「あああああん♥♥♥イクイク……」

愛らしい悲鳴がふたつあがる。

「はははは！裏切者キョウカを打ち取ったぞ！残るはアヤカだけ！」

高らかに笑い声をあげるお姉さまたち……でも……

びゅううう♥♥♥

「はあああああん♥♥♥♥♥イク♥♥♥」

びゆるる♥♥♥♥

「ひぎいいいい♥♥♥♥♥イっちゃううう♥♥♥」

キョウカの盾にされたふたなりくノーのちんぽから、断末魔の精液が二人のくノーにぶっかけられた。

びゆるびゆるるるるうう♥♥♥びゆくんびゆくん♥♥♥♥♥♥

ふたなり最期の白い噴水をぶちあげて、二人のくノーたちが崩れ落ちる。

「ば、ばかな！？はぐううう！？んぐう♥♥♥ちゅぼ♥♥♥」

用済みとばかりに盾にしていたくノーを打ち捨てて、小柄なキョウカは生き残ったくノーの顔面にしがみつくと、唇にちんぽを挿入し腰を振る。

ちゅぼちゅぼ♥♥♥じゅぼぼぼ♥♥♥♥♥じゅぶ♥♥♥ちゅぼちゅぼちゅぼお♥

「んぐうううう♥♥♥♥♥ふぶうううう♥♥♥♥♥ちゅぼちゅぼおお♥♥♥♥♥」

「はあはあ♥いいぞ♥もっとしゃぶれ♥アタシのちんぽを気持ちよくしろ……このザコくノー……」

ちゅぶうぶううう♥♥♥♥♥じゅぼじゅぼぼおおお♥♥♥♥♥♥



「よくも包茎だと罵ったな.....覚悟しろ.....あああ♥イク♥♥♥♥」

どぴゅ♥♥♥ぴゅるる♥♥♥どぴゅぴゅぴゅる♥♥♥♥

そして……残る最後のふたなりくノーの口内に直接、キョウカの『手淫剣』がぶちこまれた。

「うん♥♥んんうう♥♥♥んぐうううう♥♥♥いぐううううう♥♥♥」

びゅびゅうううう♥♥♥♥びゅるびゅるるうううう♥♥♥♥どびゅびゅううう♥♥♥♥
びゅる♥♥♥……びゅるる♥♥♥……びゅびゅ……

盛大にちんぽから最期の精液をほとばしらせて、白目を向く。

「ふう……まあまあよかったですよ♥先輩のお口……」

軽やかにくノーの口からちんぽを抜き、地面に降り立つキョウカ。

それと同時に口からキョウカの精液を垂れ流しながら、ふたなりくノーは崩れおちた。

「あひ♥♥♥あひいいいい♥♥♥無念……あひ♥」

キョウカは倒したくノーたちには目もくれず、私に向かいおっぱいを張る。

「ふふ♥アヤカ……お前は二人、アタシは四人だぞ！この勝負アタシの勝ち！うわ！？」

「キョウカ！！」

油断したキョウカの細い足は、剛根のアマネに掴まれた。

「図に乗るなよ……裏切者！！フン！！」

「あぎいいいい！？ひぎいいいいいいいい！？」

ちんぽが……アマネの極太ちんぽが……キョウカの身体を貫いた。

「ああ♥♥♥ああああああ♥♥♥♥ちんぽ♥ちんぽきたああああ♥♥♥♥」

快樂の絶叫をあげて、キョウカはちいさな身体をビクンビクンとはねあげる。

「はあはあはあ♥♥♥今日の一発目はアヤカと決めていたのだが.....まずは貴様からだ♥孕ませてやるぞ♥キョウカ♥♥♥♥」

「あああああん♥♥♥アマネ先輩♥♥♥♥すごい♥♥♥ちんぽすごい♥♥♥」

ずびゅびゅびゅうう♥♥♥ずぼずぼずぼおおお♥♥♥♥ずぼおおじゅぼおおおお♥♥♥♥

深く太くキョウカのちいさなマンコが犯されていく。

「キョウカ.....くっ.....」

「おっと、動くなよアヤカ♥下手に動けば.....か細いキョウカの身体をうっかり♥壊してしまうかもしれんぞ？」

「あああああん♥♥♥あひあひいいいい♥♥♥ちんぽすご♥♥ちんぽすごいいいい♥♥♥ズボズボってアタシの子宮まで届いてるのおお♥♥♥♥」

腰をがっしり掴まれて、逃げられないキョウカ。いや、自ら腰を振りちんぽの快樂に抗えないでいる。

「すごい.....あんなに太くてたくましいちんぽが♥キョウカの可愛いマンコを押し広げて.....ああ♥♥あん♥すごい♥キョウカ♥」

自然に手が股間に伸びてしまう。そう、たとえキョウカに気づかれていても.....

「やだ！ばか！見るなアヤカ！アタシがほかの女に犯されているところなんて見るなよ！いや♥見ないで.....お願い♥♥♥あああん♥♥♥」

「ああ♥ごめん.....キョウカ♥♥キョウカ♥♥♥♥キョウカ♥♥♥♥」

ずびゅ♥♥ずぼずぼおお♥♥♥ちゅぷ♥♥♥ずびゅ♥♥♥ズボズボズコズコ♥♥♥ぴゅる♥♥♥ちゅくちゅく♥♥♥ズコズコズコズボオオ♥♥♥ちゅくちゅぷ♥♥♥



「そんな♥見られて.....ああ♥♥♥あんなにアヤカが気持ちよさそうにオナニーしてるなんて♥アタシを見て.....あんなに♥乱れて♥♥♥ああああん♥♥♥♥やめろよお.....見るなよお.....ああああ♥♥♥♥」

向かいあい、互いの痴態から目が離せない。

ちゆく♥♥ちゆぶ♥♥♥ちゆくちゆく♥♥♥くりゆ♥♥♥

指が深く、激しく、クリトリスまで.....敵の、親友の目の前なのに.....私の指が止まってくれない。

「ああ♥そんなに深く♥めくれて♥♥♥ああん♥♥かわいいおっぱいまで♥お姉さまに揉みしだかれてる.....可愛い.....かわいい♥♥♥キョウカ♥あ♥あああああ♥♥♥イク♥♥♥」

ビクン♥♥ビクン♥♥♥ちゆく♥♥ちゆぶ♥♥♥もみもみゆ♥♥♥ちゆくちゆく♥♥♥むにゆう♥♥♥くりゆくりゆ♥♥♥ビクン♥♥ビクン♥♥♥

キョウカの愛らしくいやらしい姿に、軽く何度もイってしまう。

私もおっぱいを揉みしだき、彼女の前でクリトリスとマンコをなぐさめ続けたが限界だった.....

「うう.....言うなよお♥♥♥かわいいなんて言うな.....アタシたちはライバルだぞ！お前はアタシが倒すんだ♥なのに.....なのに.....なんでお前はそんなに.....綺麗で可愛いんだよ.....アヤカ.....んうう！？ちゆ♥ちゆぶ♥♥♥」

私は犯されているキョウカとキスをしてしまう。

ちゆぶ♥♥♥ちゆちゆ♥♥♥ちゆぴゅ♥♥♥♥ビグン♥♥♥ビグン♥♥♥♥

唇をあわせて、キスをしただけなのに.....私はイっていた。

びゅる♥♥♥びゅるる♥♥♥

それは.....キョウカも同じみたいで.....私の身体にはキョウカのかわいいちんぽから、熱い初めての精液が浴びせられていたのだ。

「ああ♥♥♥そんな♥♥キスだけでいっちゃた♥♥♥.....ごめん.....ごめんアヤカ.....アタシ.....あひ！？」

ずびゅびゅびゅうう♥♥♥♥ズコスズコスズコオオ♥♥♥ズブ♥♥ズコスズコ♥♥♥ズ
ビュン♥♥♥♥

「あひ♥あひゃああ♥♥♥まって！やだ！アマネ♥激しいよお♥♥♥やめて♥♥♥こ
れ以上は壊れちゃう♥♥♥♥ふたなりくノーでいられなくなっちゃう♥♥♥♥あひい
いい♥♥♥♥♥」

「黙れ！さっきから我れを無視して！！許さんぞ！二度と射精できないよう
に包茎ちんぽをイかせてくれるわ！！」

「ああ♥♥♥あひゃああああああああああ♥♥♥♥♥イクイク♥♥♥イクうう
うう♥♥♥♥♥アヤカごめん！アタシ！もう.....イク♥♥♥イクイクイク♥♥♥♥♥イっ
ちゃうううううう♥♥♥♥♥♥♥♥」

ビュクン♥♥♥ビュクン♥♥♥♥ビュクビュク♥♥♥

「キョウカ！！！」

アマネの剛根をきゅんきゅん♥締め付けていったキョウカのマンコ。

びゅ♥びゅるるるううう♥♥♥♥どびゅうううう♥♥♥♥びゅりゅりゅるううう♥♥♥

そして、ちんぽもすぐにびゅるびゅる♥と精液をまき散らしてイク。

「あひひゃああああ♥♥♥あひいいいい♥♥♥♥あひいいいいいん♥♥♥♥♥」

いつもクールだったキョウカが、手足をばたつかせちんぽから白いおしっこを
ぶちまけながら.....無様にいった.....

私はキョウカの精液を全身に浴びながら、その姿を見つめるだけだった.....

「おおおおおおお！？なんという締め付け♥♥♥♥くふうう♥♥♥たまらぬ♥♥♥♥
でる！射精する！！うほおおおおお♥♥♥♥♥おほおおお♥♥♥♥」

びゅううう♥♥♥♥びゅびゅうううう♥♥♥♥びゅるるるううう♥♥♥♥

キョウカの最後の抵抗に、アマネの剛根も射精するしかなかった.....だが。

「ふう♥ふうううう♥♥♥♥危なかったぞ♥キョウカ♥貴様のマンコもなかなかだったが.....我をマジイキさせるほどでは無かったな！はははは！フン！あふううん♥♥♥♥」

びゆるびゆる♥♥♥♥

「ああ♥♥♥ああああ♥♥♥♥あひ♥」

ドサッ

アマネの精液をお腹にたっぷり注ぎ込まれたキョウカが、非情にも打ち捨てられる。

「さあ♥次はお前だアヤカ♥♥♥我が剛根でキョウカのようにボテ腹にしてくれるわ♥♥♥♥」

キョウカを犯していたアマネのちんぽは、私を孕ませようとバキバキに勃起している。

「許さない.....アマネ！貴様のちんぽだけは！絶対にイかせてやる！！」

キョウカの最期の精液を浴びた私の身体は熱くほとばしっていた。

3. パイズリフェラチオで強敵にトドメを！そして.....ライバルとの最期の孕ませバトル。

「誰をイカせるというのだ！ 頭目のお気に入りだからと調子に乗るなよ！ アヤカ……ちんぽも無い小娘が！」

ブウン♥♥♥

ふたなりくノ一の里でも実力者である、アマネの剛根ちんぽが水平に薙ぐ。

射精のない単調な攻撃だったため、それを屈んで簡単に避けることができた。

「くそ！ キョウカに中出しさえしていなければ……精液の雨を浴びせられたものを……」

私を助けたばかりに、アマネに中出しされボテ腹にされた友人キョウカ……

「キョウカ……仇は討つ……」

跳躍した私は股間をアマネの顔面に押し付けて、そのまま身体をひねりアマネの身体を爆乳ごと地面に叩きつけた。

「ぐふ！？ な、なににいい！？ うう♥うぷ♥♥♥うん！？」

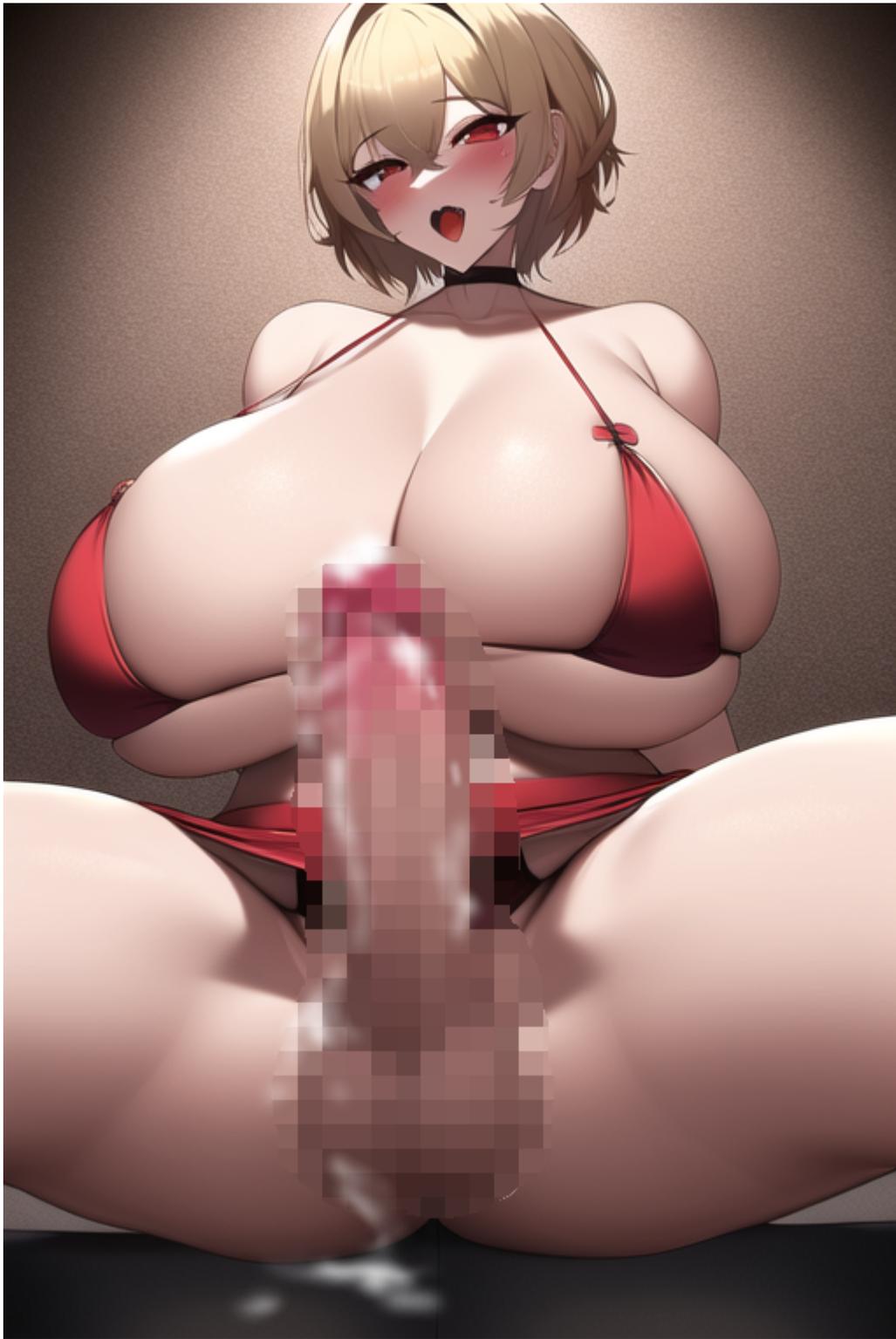
「ふたなり忍法『雌香淫縛り』」

メスの香りで、判断力を奪うふたなり忍法だ。

「はう♥♥♥クソ！ こんなメス臭い香りで……ああああ♥」

そのまま仰向けに倒れたアマネの顔にマンコを押し付けつつ、私の口は剛根ちんぽをしゃぶる。

ちゅぶ♥♥♥ちゅちゅ♥♥♥ちゅぼぼぼ♥♥♥♥



「おほおほおほおほ♥♥♥♥いきなり♥フェラチオを！？おほお♥♥おほおほおほおほおほお♥♥♥♥キク♥♥♥♥射精後ちんぽのお掃除フェラ効くうううう♥♥♥♥♥」

「はあはあはあ♥♥♥♥すごい♥キョウカの愛液がこんなに♥キョウカ♥♥♥♥キョウカ♥♥♥♥ちゅぼちゅぶ♥♥」

アマネの精液とキョウカの愛液が残る極太ちんぽをしゃぶりつくす。

「くふうう♥♥♥♥ふざけおって！ 我的ちんぽを舐めながら他の女のことを考えるなどと！ おほおほおほおほ♥♥♥♥屈辱！！ だが、貴様はこれで終わりだ！ やれ！！」

「ははっ！」

アマネの叫びにすぐ近くの茂みに潜んでいたくノーが姿を現す。

「！？ しまった……まだ、生き残りが！ うふうう♥♥♥♥」

頭を押さえつけられ、アマネのちんぽを喉の奥まで押し込められる。

敵の姿が見えない……

「ははははは！ 残念だったな！ 切り札は最後まで隠しておくものだ！ ほら！ 最後のフェラチオだ♥存分に気持ちよくしてくれよ♥♥♥」

「くく♥アヤカ♥覚悟しろ♥♥♥ボクの『手淫剣』でとどめを刺してやる♥♥♥はあああん♥♥♥手コキでオナニーでイク……イクううう♥♥♥♥」

ヤられる！

どぴゅううう♥♥♥どぴゅどぴゅ♥♥♥♥びゆるるるるううう♥♥♥♥♥

「はあああああああああん♥♥♥♥あああああああああん♥♥♥♥そんな♥♥ふあああああん♥♥♥♥アマネさまああああ♥♥♥♥イクウウウ♥♥♥♥ボクイっちゃううう♥♥♥♥♥」

長いふたなりくノーの絶叫。しかしいつまでたっても手淫剣が私に、ぶっかけられることはなかった。

「はあはあ♥詰めが甘いよ……アヤカ♥そんなんじゃアタシのライバルなんて勤まらないわよ？」

「その声はキョウカ！？ 生きていたの？」

「いや、そもそも死んでないから……ま♥アタシのちんぽも、アマネの租チン
じゃマジイキなんてしないけどね♥」

よかった……いつもの調子のキョウカだ♥

「ふ、ふざけるな！ 我をまた無視しおって！ 今度こそイかせてやるうう！ うお
おお！？ おほおおおお♥♥♥♥やわらかい♥♥♥♥あったかくて♥すごいのお
♥♥♥♥なに！？ なに！ ナニコレええええ♥♥♥♥♥♥おほおおおおおお
♥♥♥♥♥♥」

「ふたなり忍法『乳淫口内絶頂死』」

おっぱいでアマネのちんぽを挟みつけ、亀頭を唇で締め付ける。

手淫では味わえない極上のやわらかさとロマンコの壮絶な締め付けでちん
ぽに天国と地獄を味合わせる無慈悲な技だ。

俗にパイズリフェラチオとも言うが……

「うぎぎいいいい♥♥♥♥やわらかい♥♥♥♥なのに♥♥♥♥締め付けやばいの♥♥♥♥
おほほほおおおお♥♥♥♥えぐうう♥♥♥♥イクイク！ やめてええええ♥♥♥♥ゆるし
てえええ♥♥♥♥♥♥たすけてええ♥♥♥♥アヤカああああ♥♥♥♥」

にゅぽにゅぽにゅぽ♥♥♥♥きゅぷきゅぷきゅぷぷううう♥♥♥♥しゅこしゅこ♥♥♥♥
にゅこにゅこ♥♥♥♥くぷぷぷううううう♥♥♥♥♥♥

「お覚悟……」

「イぐううううう♥♥♥♥こんな♥♥♥♥こんな小娘に♥♥♥♥♥♥私の極太ちんぽが
やぶれるなど♥♥♥♥♥♥おほほおおおお♥♥♥♥♥♥イぐぐううう♥♥♥♥♥♥いぐうう
ううう♥♥♥♥♥♥あへえええええ♥♥♥♥♥♥」

アマネの精液を地面に吐き捨てて、私はたちあがる。

目の前にはちんぽを勃起させたままのキョウカの姿があった。

「ありがとう♥キョウカ.....二度も助けられたわ」

親愛をこめて手を差し出す。一人じゃないとわかった時の気持ちがこんなにもうれしいなんて♥

だけど.....

パアアンツ

私の手は払いのけられる。

「勘違いするなと言っただろう.....」

「え？」

倒れたアマネのそばにゆっくりと近寄ったキョウカは.....

「ぐぎいいいい♥♥♥♥」

びゆる♥♥♥

アマネの萎えたちんぽを踏みつけて、私を睨みつける。

「こいつのやり方が気に入らなかったただけだ.....ただ.....お前を孕ませたいと思っていたのは一緒だったがな♥」

「キョウカ♥」

キョウカの愛らしい包莖ちんぽが、ピクンピクンと私に向かって勃起している。

「さあ♥始めようアヤカ♥アタシはこいつほど優しくはないぞ♥」

「やるのね.....キョウカ.....いいわ♥あなたとなら♥本気を出せる！」

キョウカのオスちんぽを見つめるほどに、私の子宮がきゅんきゅん♥と熱くなる。

小細工は無しだ。そんなモノが通用する相手じゃない.....だから♥

「アヤカ.....♥♥♥ちゅ♥」

「キョウカ♥.....ちゅぷ♥ちゅちゅ♥」

お互い向かい合った私たちは、恋人のようにキスをして.....キョウカのちんぽを受け入れる.....

「入る♥はいっちゃう♥♥♥アヤカのおマンコでふたなり童貞すてちゃう♥♥♥」

「嬉しい♥♥キョウカも初めてなのね♥♥♥よかった.....私の初めてもあなたに捧げられて.....♥」

「本当なの！？アヤカはまだ.....処女だったんだ.....いいのね。アタシで.....」

童貞らしく初々しく顔を赤くするキョウカが可愛かったから.....

私は何も言わずに、キスと同時にキョウカのおちんぽを挿入した。

ぷちゅ♥♥ぷちぷち♥♥♥ぷきゅううう♥♥♥♥くぽぽぽ♥♥♥

「はああああああん♥♥♥すごい♥これが！これが！キョウカのおちんぽ♥♥♥♥はあうん♥♥♥」

「あ！あああああ！入ってる♥アタシいま♥キョウカのおマンコにちんぽぶちこんでる♥♥♥セックス♥セックスしてる♥♥♥♥ああああ♥♥♥」

パンパン♥♥♥パアアアアン♥♥♥♥ぷちゅ♥♥♥パアアアアン♥♥♥♥

荒々しい童貞の腰使い♥初めてのセックスで欲望が止まらないキョウカがけだもののように私を求めてくる♥

「キョ、キョウカ♥♥♥まって♥おマンコは初めてだから♥♥♥もっとゆっくり♥やさしく.....シて♥.....ね？ね？」

「ご、ごめん♥ごめんねアヤカ♥止まらないの♥♥♥童貞ふたなりちんぽ♥♥♥アヤカの処女マンコが気持ちよすぎて♥腰が止められない♥♥♥ああああん♥♥♥♥」

パアアアン♥♥♥パンパン♥♥♥パアアアン♥♥♥パンパン♥♥♥パチュン♥♥♥

「はあはあはあ.....ちゅ♥ちゅぷ♥すごい♥処女のくせになんて締め付けなの♥♥♥ああああ♥♥♥気持ちいい♥♥どんだけちんぽ好きなのよ♥許せない♥♥♥」

ちゅ♥♥ちゅぷ♥ちゅちゅ♥♥♥

「はあはあ♥キョウカこそ♥ちんぽ小さいくせに火傷しそうなくらい熱くて硬くて♥♥♥私の弱いところを探るみたいに突いてきてるよ♥♥♥」

下半身で激しく交わりながら、熱いキスを交わす.....

それでも足りなくて.....お互いの高鳴る鼓動を秘めたおっぱいを擦りつけ合った。

ぷりゅ♥くりゅ♥♥♥むにゅうう♥♥♥むにゅむにゅ♥♥♥くりゅ♥♥♥

ちゅ♥ちゅ♥♥♥パアアアン♥♥♥パンパン♥♥♥ちゅうう♥♥♥パンパアアアン♥♥♥

「あうう♥♥♥おっぱいもキョウカのおっぱいも♥♥♥ぜんぶ♥ぜんぶ好き♥♥♥もっと♥もっとキスしょ？ちゅ♥」

「甘いことを言うな！ちゅ♥アタシとお前はライバルなんだぞ！お前をイかせて子宮をおろし、確実に一発で孕ませてやる♥♥♥覚悟しろ♥♥♥」

キョウカのちんぽがさらに膨らんで、私の奥へさらに奥へ入ってくる♥

「いいよ♥……でも、キョウカはそれじゃ納得しないんだよね？だから……私も本気であなたをイカせるわ♥♥♥私がイクまえに敗北射精させてあげる♥♥♥ひぐうう！？」

パアアアン♥♥♥パアアアアアアン♥♥♥

宣戦布告に答えるごとく、キョウカのちんぽが私に打ち付けられる。

「はあはあはあああん♥♥♥すごい……もう♥イっちゃいそう♥♥♥」

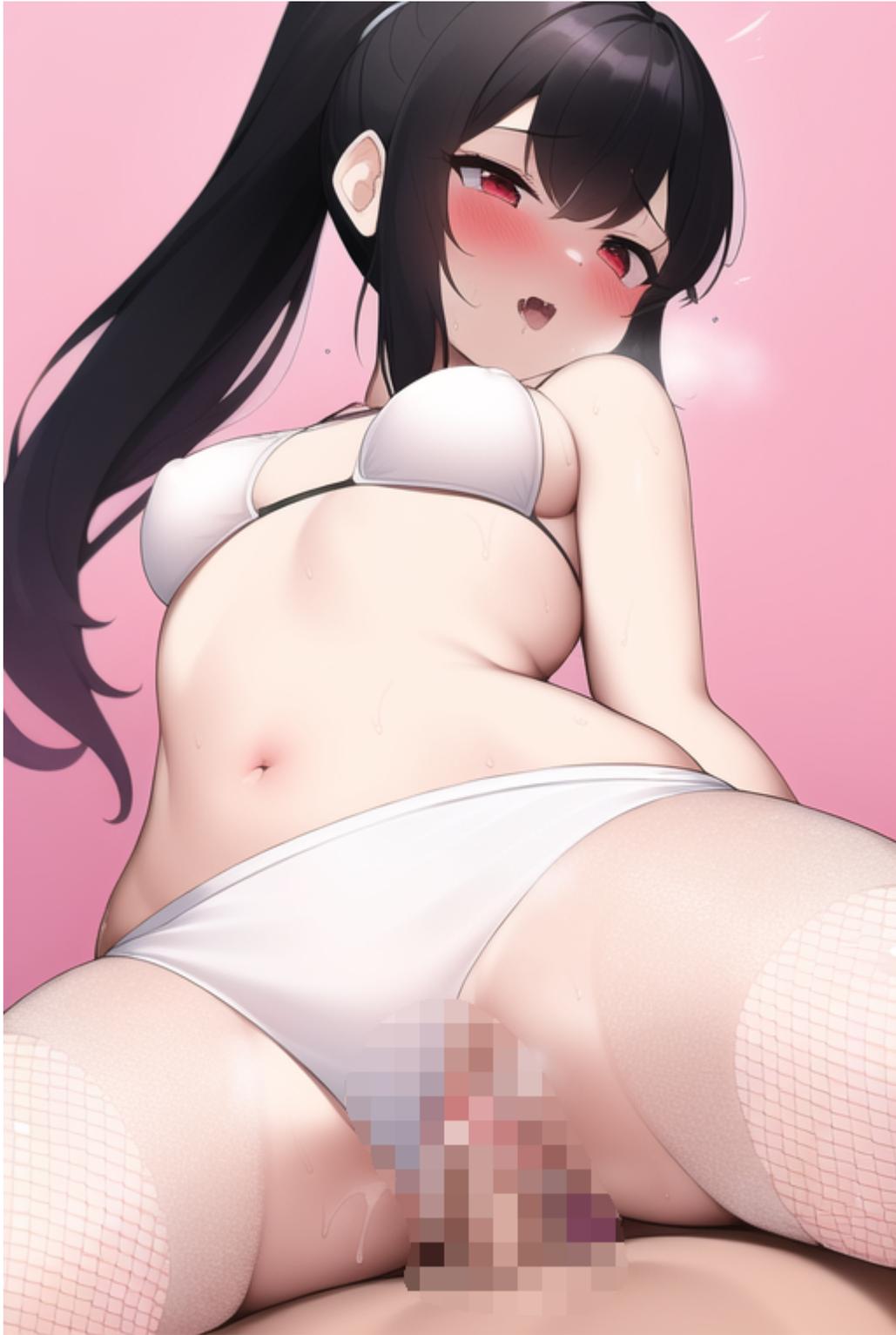
「イケ！イきなさい！アヤカ♥アタシのちんぽをこんなにもいやらしく締め付けて♥♥♥敗北射精させようと必死じゃない♥うう……止められない♥♥♥」

パアアアン♥♥♥パンパン♥♥♥パチュン♥♥♥パアアアアン♥♥♥ジュビュ♥♥

「ひゃあああん♥キョウカのちんぽすごい♥すごいちんぽおお♥♥♥イク♥♥♥イっちゃう♥♥♥あああああ♥♥♥ダメ耐えて私のおマンコ♥♥♥童貞ちんぽ敗北射精させるまで♥♥♥締め付けちゃうんだから♥♥♥あああん♥♥♥」

「はあはあはあ♥♥♥そうよ♥アヤカ！！あんたのマンコが気持ちよすぎるからいけないの！はあああん♥♥♥犯す！犯すわ！！童貞ちんぽで処女マンコ犯しまくる♥♥♥♥あなたがイクまで腰を止めないんだから♥♥♥♥」

パンパン♥♥♥ぴちゅ♥♥♥パアアアン♥♥♥パンパアアン♥♥♥にゅぷ♥♥♥パアン♥♥♥パン♥♥♥ずりゅ♥♥♥ズコズコ♥♥♥♥♥パアアアアアン♥♥♥パチュン♥♥♥パアアアン♥パンパン♥♥♥♥ちゅ♥ちゅう♥♥♥♥パアアアアアアアン♥♥♥♥♥



「イク！もう！ダメ♥♥♥♥負けちゃう♥♥♥♥童貞おちんぽに負けちゃう♥♥♥♥ああ
ああああん♥♥♥♥イクわ♥♥♥♥キョウカ♥♥♥♥すきいいいい♥♥♥♥キョウカの精子
で孕ませて♥♥♥♥子宮きてるの♥♥♥♥絶対妊娠するからああ♥♥♥♥ああああ
♥イクうううん♥♥♥♥♥♥」

「イク♥♥♥イクイクイク♥♥♥♥あふうん♥♥♥♥処女マンコに中出しいいいい♥♥♥♥
敗北射精するのoooo♥♥♥♥イって♥♥♥♥アヤカも♥♥♥♥お願い♥♥♥♥一緒に♥
一緒にイってよooo♥♥♥♥ああん♥イっく！！」

ドピュ♥ドピュドピュ♥♥♥♥ドピュウウウウウウ♥♥♥♥ビュルビュルビュルウウウ
ウ♥♥♥♥♥

ぷしゃああああ♥♥♥♥ぷしゅ♥♥♥♥ぷしゅああああああ♥♥♥♥

ビュビュビュウウウウ♥♥♥♥ドクドク♥♥♥♥ビュクン♥♥♥♥

ぴゅしゅ♥♥♥♥ぴゅるぴゅる♥♥♥♥しゅああああ♥♥♥♥

「あ.....ああ.....ぜんぶ.....でてる.....ああ.....とまらない.....」

「あは♥熱い♥お腹に子宮に♥キョウカの精液がいっぱいきてる♥♥♥♥しあわせ♥
」

同時にいった私たち.....

指と唇も重ね合わせて、私たちは出会ってから初めて一つになった.....

夕暮れが来る.....まもなく夜になる。

「一緒には来ないの？」

「当たり前だ.....アタシはお前のライバルだぞ。身体は許しても慣れ合うつ
もりはない！」

頑固なのは変わらずか.....仕方がない。私はふたたび追ってから逃れるた
め逃避行を続ける。ふたりの安住の地を見つけられるまで.....

「じゃあね.....また、会おうね約束だよ.....」

「ああ、約束だ.....逃げ延びろよ.....」

こうして、再び私は一人になった……

～エピローグ、キョウカ視点～

「行ったか……」

アタシはアヤカが見えなくなるまで、ここにとどまった。

あいつの背後を守るために……

「やっぱり、あいつは詰めが甘いわね……出てきなさい！」

「まあ♥バレてましたのね♥」

森の奥から隠していた殺気を解き放ち、あの方が現れた。

「レンさま！？まさか頭目のあなたまでアヤカを……」

「何を言ってますの？むしろわたくしが一番アヤカちゃんに執着していた事、知らなかったとは言わせませんわよキョウカちゃん？」

黒く長い髪を腰まで揺らし、アマネよりもデカイ爆乳と桃尻。妖艶な赤い唇に薄気味悪いほど穏やかな微笑みの美女。

しかし、股間には長ちんぽが堂々と勃起して揺れていた。

「レンさま……」

ゴクリ♥身体を見ただけで生唾がとまらなくなる。

出尽くしたと思ったちんぽですら、ふたたび硬く熱く勃起してしまう『イカセ流ふたなりくノ一の頭目』伊加瀬レン。

「許せませんわ♥キョウカちゃん……あなたに！あなたにアヤカちゃんの処女を奪われるなんて！！」

眼光だけでイってしまいそうになるのを必死にこらえる。

「何をいまさら……あなたが皆にアヤカを孕ませろと命令したのではありませんか！」

精一杯の虚言で反論できた。だが……

「おほおーほほほほほ♥お前たち雑魚くノーにアヤカちゃんを孕ませられるわけ無いでしょう？お前もアヤカちゃんのお情けでセックスさせてもらったくせに！！」

アマネ先輩が可愛く思えるほど、冷酷な答えだった。

「許さない……」

「許さないなら……♥どうするというのかしら？」

「お覚悟……」

震えるちんぽを必死にこらえて、アタシはレンさまに挑んだ……

挑んでしまったのだ……

……月が出ていた。

その光に照らされて、指についたアタシの精液をなめとるのは腰まで伸びた長い黒髪のふたなりくノー。

「うふふふふ♥ちゅぱ♥♥はうん♥♥♥最期の精液まで濃いですわね♥アヤカちゃんがいなければ、わたくしの一番の寵愛を受けられたものを……」

ビュクン♥♥♥ビュクン♥♥♥ビュク♥

射精が止まらない……止まってくれない♥

「アヤカ……ごめんね♥約束守れなかった♥ああああん♥♥♥」

どびゅぴゅぴゅ♥♥♥びゅ♥ぴゅる♥……

アタシのちんぽがガクリと萎えて墮ちた。

4.ラスボスくノ一の爆乳パイズリでおっぱいが敗北射乳！？早漏長ちんぽが子宮を狙う。

「キョウカ……大丈夫かな……」

お腹に残るライバルとの愛し合った温もりを感じながら、私は夜の森を進む。

「あひ……あへ……♥」

！？女の子のあえぐような声が聞こえた……

そこには、開けた草むらの大きな一本松があった。

「あひ♥……アヤカ……あふ♥」

まさか！

思わず森から飛び出してしまった私の前には、無残な姿のキョウカが吊るされていた。

「あふ♥♥♥アヤカ……射精止まんない……おちんぽ萎えちゃったのに……あふ♥お射精止まらないの♥♥♥」

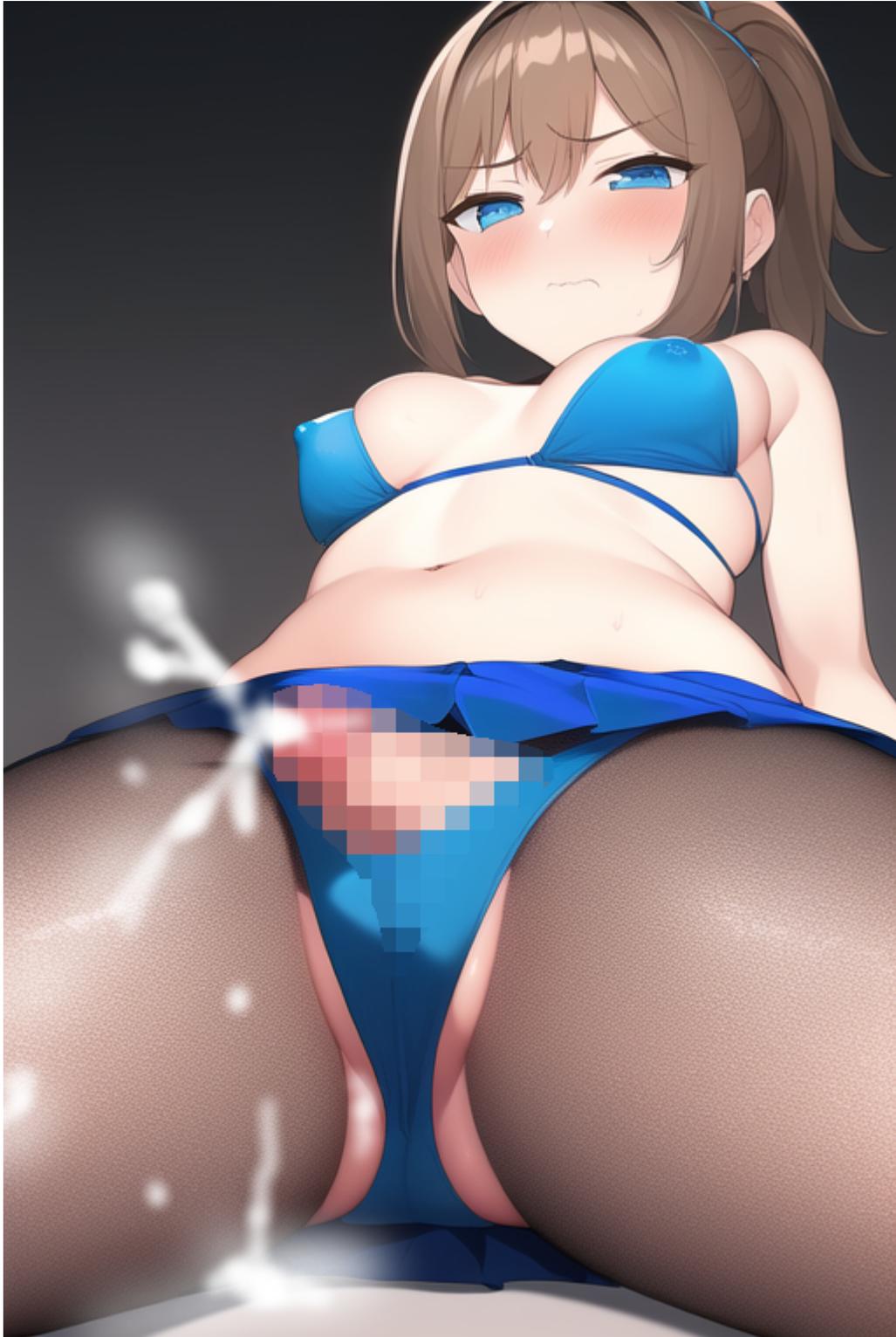
ぴゅぴゅ♥♥♥ぴゅ♥ぴゅぴゅ♥♥♥ぴゅる♥

縛られた手で扱くこともできずに、ただただ萎えた包茎の可愛いふたなりおちんぽからぴゅぴゅ♥と精子を吐き出し続けるキョウカ。

「あふ♥♥♥きもちいい……やだ……おちんぽ終わっちゃう……射精もう少しかできなくなっちゃう♥♥♥♥」

ぴゅる♥♥♥ぴゅ♥ぴゅぴゅ♥♥♥……ぴゅ♥

徐々に精子の勢いが弱まっていく.....キョウカのふたなり人生が終ろうとしているのだ.....



ぷりゅ♥.....ぴゅる♥.....ぴゅぴゅ♥♥♥.....

「キョウカ！……ひどい！なんでこんな姿に！きゃ！」

びゅびゅ♥

近寄ろうとした私の足元に『手淫剣』が放たれた。地面にぶちまけられた『手淫剣』はもわもわと湯気をあげ、辺りに異臭を放つ。

「ううう♥♥♥すごいイカ臭い♥ううん♥オス臭い♥♥♥はう♥臭いを嗅いだだけでこんなに♥♥♥」

ただの『手淫剣』ではない……こんな、強烈なフェロモンを出せるふたなりくノ一は一人しかいない♥

サンプル版END

続きは製品版でお楽しみください。

**この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件とは一切関係がありません。**

18歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

**無断転載・複製・複写・Web上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)
は禁止です。**

読者のみなさん、こんばんは～
ヘンタイ小説家のエロバトルンです。



作品を最後まで読んでいただき
ありがとうございました！

これからも、「凌辱」「復讐もの」「ざまあ」「敵女」
または、「男性受け」「おねショ●」「ふたなり」
などのジャンルを書いていきます。

よろしければ、フォローや
高評価、お気に入り登録で
応援していただけると
嬉しいです。

感想レビューで、好きな
ヒロインの名前やエロかった
シーンを教えてください！

twitterで情報更新中です。
こちらもフォローを
よろしくお願いします。



🔍 エロバトルン 検索

*ご注意CGのみAI生成を使用しています。

[エロバトルン - pixiv](https://pixiv.com/users/furizumu)

<https://twitter.com/furizumu>